

サーキット・ライダー 2004年 1月

学び分かち合う

主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも論しをも侮る。 箴言 1：7.

知識は人を高ぶらせるが、愛は人を造り上げる。自分が何か知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならぬことをまだ知らないのです。 1 コリント 8：1－2.

何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

フィリピ 2：3－4.

不安と希望の混交のうちに新しい年となりました。遅くなりましたが明けましておめでとうございます。本年も宜しく願いいたします。以前、ホーム・ページの牧師雑記帳に書きましたが、時々「何故、いつまでも勉強する（学校に行っている）のですか。」と尋ねられる事があります。そういう時私は「若い頃あまり勉強しなかったから付けが回ってきたのです。」と冗談を言ったりしますが、実際には学ぶ事、知ることは人間成長に必要不可欠だからと思っているからです。しかし時に知識は人を傲慢にします。使徒パウロは「自分が何か知っていると思う人がいたら、その人は知らねばならぬことをまだ知らない。」この状態の人を「半端なインテリ」と私は呼び、自分もそうであると戒めています。「軍師、軍略におぼれる」という諺がありますが、およそ知識に頼る人は知識におぼれ、技術に頼る人は技術におぼれる。それが人間です。

また経験を積むという事は実に大切なことですが、経験ばかり尊重して神の言葉＝聖書の教えから学ばない人もやはり傲慢になることが多いようです。この考えに立つ人たちは、では経験していないことはどうするのか、と私は疑問に思ってしまうし、聖書や先人の知恵を学ばないなんて何てもったいないと思います。本当に学び経験すると言う事は、へりくだり自分の未熟さを常に知り、学校に限らず、どこにあっても人を自分の師として学ぶ事を意味しています。そのように謙虚且つ聡明で円熟した人間になれると良いのですが、これはどうやら一生掛かってもなれるかどうか…。

仏教の精神に「中道」というものがあります。これは極端を捨てて真ん中を行くといことですが、決して消極的或いは妥協的生き方ではありません。寧ろ積極的に普通であろうとする。釈迦は悟りを開いた時に、「人は荒修行によって肉体を痛めすぎても何も悟らない。また学問や冥想など自分の内面にばかり向き合っても悟れない。寧ろ、ほどほどに肉体も精神も修養し、実生活の中で、人としての歩みをしていくことの中に真理があり、悟ることはこの日常の生活を普通にすることである。」としています。これは人間性をそのまま受け入れながら、過ぎたる、を戒めることですが、例えば、食べ物欲するのは生きる上で必要不可欠で、多少美味しいものを頂くのも食欲増進、健康維持のためには良いことです。しかし食欲の成すがままに食べ過ぎたり、美味しいものばかり食べていてはかえって体を害してしまいます。より快適な生活をしたい、その為働くというのは悪いことではありません。しかし、働き過ぎて体を壊したり、自分の欲の成すがままに物を買占め、貧しい人たちが回りにいても何もしないのは罪です。色々なところにこの「中道」は当てはまります。

これは基督教にあっても同じ。もしクリスチャンが一所に集まり社会に出ず、祈り、学び、讃美だけして他者と関わらなかつたら何の為の教えでしょうか。また社会活動は大切ですし、しなければなりません、そればかりして教会生活から離れたり、祈りや学びを忘れて何の信仰でしょうか。中道とは今日風に言うならバランス感覚です。私達はバランスの取れた信仰生活をしなければなりません。これは家庭生活と教会生活、祈りや学びと実際の奉仕、人として或いはクリスチャンとしての責任と自由など全てに当てはまります。メソジストの創始者ジョン・ウエスレーは「右手に聖書、左手に奉仕」と唱えて、18世紀イギリスにリバイバルを起こしたほどの信仰者で、連日早朝祈祷から始め、聖書を学び、讃美し説教をして歩いた人でしたが、刑務所伝道や工場巡りをしてイギリス国教会から見放されていた労働者達に救いを宣べ伝え伝道をした「実践の人」でもありました。

私にとって学ぶということは主を畏れ敬うことの初めであり、自分がまだまだ無知であるということを悟る為であり、経験とは人から学ぶという謙虚な態度を身に付けることす。遥かな道のりではありますが。

吉松 純